事後評価報告書（実行団体用）

１．基本情報

１-１）実行団体名：一般社団法人栃木県若年者支援機構

１-２）実行団体事業名：小さなものづくりから始まる「しごとはじめ」×「誰でも学べる寺子屋」で、社会とのつながりに苦しさを抱える人たちに安心を

１-３）資金分配団体名：特定非営利活動法人まちぽっと

１-４）資金分配団体事業名：市民社会強化活動支援事業（Pecs）

１-５）事業の種類：草の根活動支援事業

１-６）実施期間：2020 年５月から 2023 年３月

１-７）事業対象地域：栃木県

2.事業概要

２-１事業計画と結果

２-１-１）優先的に解決すべき社会の諸課題

① 領域： ①子ども及び若者の支援に係る活動
②地上生活又は社会生活を営む上での困難を有するものの支援に係る活動

② 分野： １：経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
２：日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援
３：社会的課題の解決を担う若者の能力開発支援
４：働くことが困難な人への支援
５：社会的孤立や差別の解消に向けた支援
６：地域の働く場づくりの支援
７：安心・安全に暮らせるコミュニティづくりへの支援

③ 直接的対象グループ： ひきこもり・不登校の当事者 150 人

④ 間接的対象グループ：この活動を知ることでひきこもりの参加について考える人たち 1000 人

２-１-２）事業の背景・課題

〇社会的課題

取り組みたい課題は「ひきこもり」。8050 問題や不登校などの課題は、当事者側だけの問題ではなく、当事者と環境の接点にあるソーシャルワーク的課題（≒地域課題）である。
特に早急に取り組みたい課題は、１：社会参加のためのロールモデルの構築。２：「相談の次の高すぎるステップ」の多様化。３：社会参加＝就労という図式にとらわれた社会の変容。の三つとした。多様な社会参画を容認する地域づくりが急務である。

〇課題に対する行政等による既存の取組み状況

2018 年 12 月、内閣府は 40 歳から 64 歳を対象にしたひきこもり調査を実施し、具体的支援の検討に入った。相談支援センターは 2019 年４月現在、全国 75 か所。栃木県は２か所で

ある。

センターからの出口は、主に各就労支援機関が担っている。リモートワークや通販サイトの拡大も支援のインフラとなり得る。

中高年の長期ひきこもりに対する社会的関心も高まっているが、個別に対応できる出口は殆んど整備されていない。

《中長期アウトカム》

栃木県において、ひきこもりや不登校等、社会に対する生きづらさを抱える人々に対する理解及び支援の多様化が進み、様々な生き方を受容できる地域・社会になる。そのために、ＳＮＳ相談窓口の開設、多様な自己理解・能力開発支援の場の設置を行いそこから地域社会にひきこもりの問題や支援活動に対する理解を喚起する。

具体的には作業の場である「てしごとや」と学びなおしの場である「寺子屋」を運営し、社会につなぐスモールステップを作ることで、当事者の社会参画の機会を拡大する。

２−２本助成事業終了後の事業活動（出口戦略）

- 「てしごとや」で作った作品を販売することで活動維持の一助とする。それだけでは資金的に不足が生じるため、活動の周知とひきこもりに対する理解の醸成により寄付を集めて活動を継続する。
- 事業の必要性を社会が理解することで、地域に同様の支援の場ができる。
- ＳＮＳ相談のノウハウを蓄積し、マニュアルを作成することで同様の活動が広がる。

３．事後評価計画・実施概要

３−１事後評価計画

《評価項目・評価小項目》

〇アウトカムの達成度

３つのアウトカムの目標値に対してどの程度達成できているか

＊団体内理事と分配団体による共同評価による検証

〇波及効果：

同様の事業が周辺に立ち上がっているか

＊実際にそのような事業が存在するかをもって検証

〇事業の効率性：

参加した当事者に状態変化が起きているか

＊当事者および、当事者の周辺の人々へのインタビューにより検証

３−２事後評価実施概要

３−２−１）評価ポイントの設定・実施（どのような変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか）

①−１：いままでどこにも相談できなかった当事者が、ＳＮＳを通して相談できるようになることで、社会的資源につながる当事者が増える

【指標】相談件数と社会的資源につながった人数

①-2：ＳＮＳ相談のノウハウを蓄積し、それを開示することで、他のひきこもり支援事業者がＳＮＳ相談を開始することができるようになり、全国の相談事業が活性化する。

【指標】事業実施元に問い合わせあり、その後ＳＮＳ相談を開始した事業所の数

②-1：ひきこもり等当事者が学びなおしの場を得て高認等の資格を取得することにより、自信をもって就職活動に臨めるようになる。

【指標】学びなおしの場への参加者数、資格取得者数、参加者の内的・外的状況変化

②-2：地域の企業とひきこもり当事者をマッチングさせることにより、地域の人材不足が解消されるようになる。

【指標】参加企業数および就職者数

②-3：ひきこもり等当事者が中間的就労の場に定期的に通うことにより、自分や社会に対する不安が緩和され、自信を取り戻すことができるようになる。

【指標】参加者の内的・外的状態変化（新しい行動を開始する）

②-4：ひきこもり等当事者が、ものつくりを学び、自分の作品を販売することで、収入を得ることができるようになる。

【指標】参加者数および販売金額

③地域社会がひきこもりや不登校についてより深く知り、それが個人だけの問題ではなく、個人と社会双方の問題であるとの理解が進むようになる。

【指標】活動報告書に添付するアンケート

④Covid-19 感染拡大の影響により困難となった事業活動をオンライン化し、新たな作業のあり方、仕事の獲得のしくみをつくる。

【指標】新たな作業方法等の実施の可否、新たな仕事の獲得方法の可否

３-２-２）実施した調査（どのような調査を実施して測定したのか）

【①―１】（定量）相談件数と、地域資源につながった人の数を計量

【①―２】（定量）問い合わせの数と、実際に SNS 相談を開始した事業所の数を計量

【②―１】（定量）参加者数、資格取得者数（定性）担当者の感じる参加者の変化を記録

【②―２】（定量）参加企業数と就職者数を計量

【②―３】（定量）当事者へのアンケートを実施し、事業参加前と参加後の状態変化を計測

（定性１）当事者および当事者の周辺の人々への面談により参加者の内的変化を記録

（定性２）担当者の感じる参加者の変化を記録

【②―４】（定量）参加者数および販売金額を計量

【③】（定性）社会風土の醸成が進んでいるかどうかを報道量等で記録

【④】（定量）新たな作業方法の実施可否

３-２-３）調査結果の分析（調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか）

（定量）計画数値と実際の数値を比較し、効果がどの程度得られたのかを判断した。

（定性）できるだけ担当者の主観に頼らないよう、当事者および第三者の評価も交え、それを定性データに置き換えて判断するよう工夫した。

３-３実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

《計画時》

・　栃木県若年者支援機構理事・スタッフ、資金分配団体（ＮＰＯ法人まちぽっと）

《事後評価実施時》

・　一般社団法人栃木県若年者支援機構　代表理事　中野謙作
・　一般社団法人栃木県若年者支援機構　事業担当者　大藤園子
・　ＮＰＯ法人まちぽっと　事務局長　小林幸治
・　ＮＰＯ法人まちぽっと　Ｐｅｃｓプログラム・オフィサー　金和代
・　立教大学教授　後藤広史

４．事業の実績

４-１インプットの計画と実績

４-１-１）資金

①　事業費（自己資金含む）10,034,960円
　＊内訳〔直接事業費〕9,311,360円/〔管理的経費〕723,600円

②　評価関連経費（計画時）300,000円/（実績額）133,048円（ご記入時点での額でご記入ください）

③　コロナ対策緊急支援追加額 1,394,000円

④　助成額（計画時合計額）7,394,000円

⑤　助成額（実績合計額）7,394,000円（ご記入時点での額でご記入ください）

⑥　自己資金の種類と金額（計画時額）

・種類：事業収入＝
　2020年度：360,000円/2021年度 480,000円/2022年度 600,000円

・種類：他事業収入＝
　2020年度：536,320円/2021年度 352,000円/2022年度 222,000円

・種類：寄付＝
　2020年度：0円/2021年度 40.320円/2022年度 50,320円

⑦　自己資金の種類と金額（実績額）

・種類：事業収入＝
　2020年度：512,037円/2021年度 698,265円/2022年度 700,363円

・種類：他事業収入＝
　2020年度：482,183円/2021年度 0円/2022年度 0円

・種類：寄付＝
　2020年度：0円/2021年度 0円/2022年度 45,000円

⑧　自己資金の調達で工夫した点など（自由記述）：

初年次は活動開始直後であり、他の事業収入から補填せざるを得なかったが、２年目からは事業収入と助成金で動けたのは大きな成果だった。工夫した点は、内職の請負先を開拓するために、組織の様々な方が各方面に「仕事があったら引き受けたい」と声をかけてくださったこと。事業部内ではなく、他の事業部の方が動いてくださったので、広い人脈から話をいただく

ことができた。支援内容について各方面に周知するのは大切と感じた。

４-１-２）人材

① 計画時：

計画当初は３名体制の予定だったが、コロナ緊急支援で「家から出られない人に仕事を用意する」ことを決め、アウトリーチ人員を加えて４名体制の計画に変更した。

② 実　績：

最終的には５名体制となった。（事業担当者・ＳＮＳ担当者・トレーナー・洋裁実技指導者・アウトリーチ担当者）

４-１-３）資機材（事業で購入した高額の資機材の主要なものを記載してください）

① 計画時：ミシン５台・コロナ緊急基金が追加になったことにより、ＰＣＩ台を追加。

② 実　績：ミシン二台・ＰＣＩ台

（専門の指導員のアドバイスを受け、性能の良いミシンを２台に絞って購入）

４-２活動とアウトプットの計画と実績

４-２-１）主な活動の計画と実績

《アウトプット（計画時：概要、指標、初期値/初期状態、目標値／目標状態、目標達成時期、実績値）》

①-１：いままでどこにも相談できなかった当事者が、ＳＮＳを通して相談できるようになることで、社会的資源につながる当事者が増える。

【指標】相談件数と社会的資源につながった人数

【初期値/初期状態】０

【目標値/目標状態】100件/3年

【目標達成時期】2023年３月末

【実績値】登録者60人/のべ相談件数365件/社会資源につながった人数４名

①-2：ＳＮＳ相談のノウハウを蓄積し、それを開示することで、他のひきこもり支援事業者がＳＮＳ相談を開始することができるようになり、全国の相談事業が活性化する。

【指標】事業実施元に問い合わせあり、その後ＳＮＳ相談を開始した事業所の数

【初期値/初期状態】０

【目標値/目標状態】５件/3年

【目標達成時期】2023年３月末

【実績値】０件/3年

②-１：ひきこもり等当事者が学びなおしの場を得て高認等の資格を取得することにより、自信をもって就職活動に臨めるようになる。

【指標】学びなおしの場への参加者数、資格取得者数、参加者の内的・外的状況変化

【初期値/初期状態】参加者24人/年・資格取得10人/年・状態変化/未確認。

【目標値/目標状態】参加者64人/年・資格取得25人/年・資格取得者の20%が次の支援もしくは就職につながる

【目標達成時期】2023年３月末

【実績値】参加者 58 人/年・資格取得 14 人/年・資格取得者の４０％が次の支援または就職につながる。

②-2：地域の企業とひきこもり当事者をマッチングさせることにより、地域の人材不足が解消されるようになる。

【指標】参加企業数および就職者数

【初期値/初期状態】０社０人

【目標値/目標状態】15 社 10 人

【目標達成時期】2023 年３月末

【実績】０社０人

②-3：ひきこもり等当事者が中間的就労の場に定期的に通うことにより、自分や社会に対する不安が緩和され、自信を取り戻すことができるようになる。

【指標】参加者の内的・外的状態変化（新しい行動を開始する）

【初期値/初期状態】31 人中 6 人（１９％）に「就労支援機関につながる」「アルバイトを開始する」等の状態変化

【目標値/目標状態】100 人中 30 人（30%）に状態変化が見られる

【目標達成時期】2023 年３月末

【実績】90 名が活動に参加し、うち６名にマイナス変化（コロナ禍や体調の悪化により、外に出始めた当事者が家に戻ってしまった）37 名（41%）にプラスの状態変化

②-4：ひきこもり等当事者が、ものつくりを学び、自分の作品を販売することで、収入を得ることができるようになる。

【指標】参加者数及び販売金額

【初期値/初期状態】7 人/3 年・1 万円/3 年

【目標値/目標状態】30 人/3 年・50 万円/3 年

【目標達成時期】2023 年３月末

【実績値】参加人数 2022 年 12 月 22 日現在、のべ 1749 名/販売金額 274，230 円

③ 地域社会がひきこもりや不登校についてより深く知り、それが個人だけの問題ではなく、個人と社会双方の問題であるとの理解が進むようになる。

【指標】活動報告書に添付するアンケート

【初期値/初期状態】未確認

【目標値/目標状態】1 回目と３回目に状態変化が見られる（理解が深まっている）

【目標達成時期】2023 年３月末

【実績】＊未実施（2023 年２月実施予定）

④ Covid-19 感染拡大の影響により困難となった事業活動をオンライン化し、新たな作業のあり方、仕事の獲得のしくみをつくる。

【指標】新たな作業方法等の実施の可否、新たな仕事の獲得方法の可否

【初期値/初期状態】実地での作業が困難

【目標置/目標状態】新たな作業方法等の実施、新たな仕事の獲得方法の実施

【目標達成時期】2021 年３月

【実績】①2021 年３月に野州麻作品制作指導用動画を作成。2023 年 1 月末現在までに４名が麻仕事にチャレンジし、２名が継続して作業中。②アウトリーチによる内職や

テープ起こしの作業配送を実施。2023年1月末現在までに14名が参加し、うち12名が現在も継続。2名は作業場に来て一緒に作業ができるようになった。

《主な活動》

①ＳＮＳ相談について。

【活動概要】2020年11月フライヤー作成・ホームページに掲載し告知を開始した。

【活動から見えてきたもの】計画では曜日・時間を決めて応対することとしていたが、実際に開始してみるとランダムに対応することが多くなった。特に緊急性の高い案件については休日対応が起きることもあり、今後どのように運営をしていくかは課題である。相談はチャットで始まるが、その後通話に移行する率が高いことは想定外だった。チャットと違って集中して時間を費やす必要があるため、ここも今後どのように運営していくか課題が残る。
もうひとつ。活動の波及について力を注ぐことができなかったことは大きな課題である。今後、活動そのものを支援団体に周知していくことが必須と考えている。

③ 能力開発の場の提供について。

【活動概要】いずれも既存の事業である「学びなおし」の寺子屋と「しごとはじめ」のてしごとやをパワーアップし、当事者と社会をつなぐ資源として確立することができた。地域の相談機関や医療機関とのつながりが増え、参加者も当初は団体内からの紹介が多かったが、3年目は4割が他団体からの紹介となり、地域に定着してきた感がある。

【活動から見えてきたもの：寺子屋】手弁当の事業であるため、今後も他事業からの収入を活用するなど資金調達が引き続き課題となる。

【活動から見えてきたもの：てしごとや】事業収入がいまだ１００万円に到達できず、自走するためにはさらに工夫と努力が必要である。次年度以降は、この３年間で得たノウハウとネットワークを活用して、リメイク事業を企画しており、そこから収益を得られるよう活動を継続していきたい。

【活動から見えてきたもの：地域企業とのマッチングについて】「てしごとや」事業から直接企業につながる登録生は残念ながら出現しなかった。企業開拓に力を入れられなかったことは反省点である。別の事業部である「しごとや」から就職を目指している登録生が複数名おり、次年度につながる動きと感じている。

④ ひきこもり支援を社会に浸透させていく

【活動概要】毎月の活動予定に通信文を添付する、コミュニティラジオに出演する、取材を受けて新聞に掲載していただくなどにより活動の周知を行った。

【活動から見えてきたもの】通信文の感想を毎回くださる支援機関など、活動を好意的に捉えてくださる団体が多かった。周知に使えるパワーが不足しており、散発的な紹介になってしまった時期も多かったことは反省点として残る。地域の中で同様の事業をと企画してくださっている支援機関も出現した。３年間の実績には至らなかったが、今後に種をまいたと感じている。

《主な活動における実績》

①ＳＮＳ相談

・登録者60人/のべ相談件数365件/社会資源につながった人数４名。他に相談受付を開始し

た事業所は残念ながら０となった。

②能力開発の場の提供

【寺子屋】数値的には目標に到達しなかったが、会場は当初より１会場増え、かつ一人一人の状態変化が濃密であった。特に、一度社会に出たり、長期ひきこもりから「てしごとや」につながったりして、社会参加の中で学びなおしの必要を痛感してやってきた登録生の熱意は顕著である。地域ではこの間に夜間中学の設立も行われており、リカレント教育の場として地域に定着していることを感じている。

【てしごとや】31人中６人（１９％）に「就労支援機関につながる」「アルバイトを開始する」等の状態変化があった。その他内的変化はほとんどの登録生に顕著である。自己就職を果たしたものの、１日でリタイアしひきこもり状態に戻ってしまった登録生もおり、変化は前進のみではなく、かつ前進したとしてもそこにまた壁を感じて戻ることもあるのだと感じることも多かった。だが、それとあわせて本事業が「何度でも戻ってよい受け皿」となれていることを実感した。本助成により、「人生は一直線ではない」ということを共有しながら伴走を続けていく仕組みは構築されたと考えている。

【地域企業との連携による就職】０社０人。活動が至らなかったと反省している。

③ひきこもり支援を社会に浸透させていく

・県内各地の支援機関との連携強化（いままでは団体内の事業所からのつながりがほとんどだったが、３年目には４割が他団体からの紹介となった）。厚労省の生活困窮事業の浸透とあいまって、ひきこもり支援に対する理解は進んでいると感じている。まだ実際に「寺子屋」や「てしごとや」のような居場所が開設された実績はないが、今後も継続して活動を周知していくことにより、理解を深めていきたい。

４−３外部との連携・協力などの実績

- 資金分配団体のご紹介により、ECOM様の関わった「花咲フェス」に動画で参加。
- 栃木県の特産品である「野州麻」を生産する農家（大森さん）とつながり、麻製品制作指導や作業の請負をすることができるようになった。
- 地域の方の紹介で複数の内職を定期的に受託できるようになった。

４−４成果の分析（アウトカムの達成度と分析）

４−４−１）短期アウトカムの計画（計画時：概要、指標、初期値/初期状態、目標値／目標状態、目標達成時期）》

①栃木県において、本事業によってSNS相談窓口が新設されることにより、今まで相談したくてもできなかったひきこもり等当事者の声を拾うことで、社会が新しいニーズを把握し、支援の内容がより当事者の困り感に添ったものになる。

【指標】ＳＮＳ相談を経由してつながったひきこもり等当事者に対して、支援の成果が生まれるか否か。

【初期値/初期状態】０

【目標値/目標状態】ＳＮＳ相談を通して、既存の支援以上に当事者が何らかの支援につながる割合が増える。

【目標達成時期】２０２３年３月末

②栃木県において、本事業によって不登校やひきこもり当事者への多様な自己理解・能力開発支援の場ができることにより、社会や自分に対する自信や信頼を取り戻し、社会参加の意欲が高まる当事者があらわれる状態になる。

【指標】ひきこもり等当事者が本事業に参加することによって、内的外的状態変化が見られるか否かを当事者へのアンケート調査により計量。

【初期値/初期状態】未調査

【目標値/目標状態】支援開始前と比較して、支援開始後に当事者の不安や自信が回復されている。

【目標達成時期】２０２３年３月末

③栃木県において、本事業の活動内容や活動のノウハウを蓄積し、時に応じて開示することにより、地域社会にひきこもりの問題やその支援活動が周知され、ひきこもりに対する理解と容認が深まる状態になる。

【指標】地域社会に、ひきこもり等社会の中で生きにくさを感じている人々に対する新しい支援ネットワークが生まれるか否か。

【初期値/初期状態】０

【目標値/目標状態】地域社会に新しい支援ネットワークが生まれ、多様な経験を経て生きることが理解されるようになる。

【目標達成時期】２０２３年３月末

４-４-２）短期アウトカムの達成度（実績：概要、実績値、要因、課題など）

①ＳＮＳ相談について

【概要】２０２０年１１月開始。ＬＩＮＥ公式登録者 60 人/のべ相談件数 365 件/社会資源につながった人数４名。他に相談受付を開始した事業所は 0。相談の前の活動周知および困りびとへの発信ツールとしてストリーミング配信アプリ「Ｓｐｏｏｎ」での定期配信を行った。（毎週水曜日９：００～１１：００）そこからつながった人も多い。そのため当初は県内の相談を想定していたが、全国から人々がつながった。

【社会資源につながった人々】

- Ａさん（他県）：２０代。ひとり親家庭。生活困窮。地域の生活福祉課窓口を案内し、世帯ごと生活保護受給となる。その後当人が就労開始し、自立することができた。
- Ｂさん（栃木県）：５０代。生活保護受給単身者。当初はチャット、その後通話相談を定期的に行う。会話の中から発達障害を疑われるものを感じたため、１年半をかけて地域の支援機関に誘導。その後通院開始した。
- Ｃさん（栃木県）：２０代。疾患と困窮の相談。地域の生活困窮者自立支援の窓口に誘導した。
- Ｄさん（栃木県）：２０代。生きづらさの相談。チャット相談からてしごとやに誘導し、現在「てしごとや」に通いつつ通院を開始した。

【課題】①活動の周知不足：告知が、フライヤーの配布とホームページおよびＳＮＳ（Ｆａｃｅｂｏｏｋ）への掲載、Ｓｐｏｏｎでの発信のみだったので、利用者が思ったより少なかった。②今後の運営をどうするか：今は一人が専任で行っているが、今後周知が進むにつれて人数の不足が出てくる可能性がある。また、緊急性が高い場合には曜日昼夜問わずの対応が必要とな

ったケースもあり、どこまでやるのか、の線引きが難しい。

②能力開発の場の提供について。

【概要：寺子屋】参加者 58 人/年・資格取得 14 人/年・資格取得者のうち６人が次の支援または就職につながる。紹介元は、各市の SSW、青少年自立支援センター、県の総合教育センター、中学校の教員等。

【参加者のプロフィール（一部）】

- Ｓくん　高卒認定３年で６回受けて残り英語１科目。高卒認定取得したら、てしごとやに行くと決めており、２回説明を聞いている
- Ｓさん　社会人で、理学療法士になりたくて専門学校を目指している。現在受験に向けて学習中
- Ｔくん　東京で働いていたが挫折して帰京。残り４科目の高卒認定目指して学習中
- Ｗくん　就業中だが、学力がないと職場で責められて学習している。
- Ｗさん　小学校低学年からの不登校で、学びの経験はほとんどない。最初てしごとやに参加し、そこから寺子屋に来た。今は小学校の始めから学び直ししている
- Ｆさん　特別支援学校卒業して就職したものの長続きせず、職を転々として現在無職。勉強しないと、と焦って勉強中
- Ｒさん　タイ人で８年前に母と来日。まだ片言だが、現在運転免許取るために学習している

【課題】無料で参加していただくことが大前提なので、今後もやはり予算の確保は課題である。各教室スタッフ１名＋ボランティアのスタッフ人件費。教材費。お菓子代（月に 1～2 回は支援があるが、その他は持ち出し）。そのため安定した財源が必要である。

【概要：てしごとや】3 年間の登録人数 90 名/参加人数（2022 年 12 月 22 日現在）のべ 1749 名/作業回数 641 回/販売金額 274，230 円

【参加者のプロフィール（一部）】

- Ｅさん（３０代）：緘黙気味で当初会話がほとんど成立しない状態だったが、編み物の面白さに目覚めてから表情が明るくなり、積極的に作品制作を行うようになった。現在は自分の「気持ち」を言語化することが少しずつできるようになっている。
- Ｆさん（２０代）：就労経験がなかったが、作業に参加するうち自分でアルバイトを見つけて開始。てしごとやを卒業し継続的に就労している。
- Ｇさん（１０代）：通信高校を卒業したが、不安が強く社会に出ることが困難な状態だった。オンライン作業指導により麻縄制作を開始。作品の質が良く、請負元からの評価が高い。今は麻縄制作以外にも自分でアクセサリーを作ったりと家でできる手仕事を行うことが楽しいとのこと。
- Ｈさん（２０代）：社会不安があり、就労に強い拒否感を示していたが、てしごとやに通ううちに自信をつけた様子で、現在就労移行支援事業所への通所をめざして体験中。

【課題】地域の産業とつながることにより就労先を開拓したいと考えていたが、主にパワーを注ぐことができなかったことが原因で開拓に至れなかった。内職等の作業を受託することはできるようになってきたが、今後はより強固なつながりを作ることにも注力していきたい。

③ひきこもり支援を社会に浸透させていく

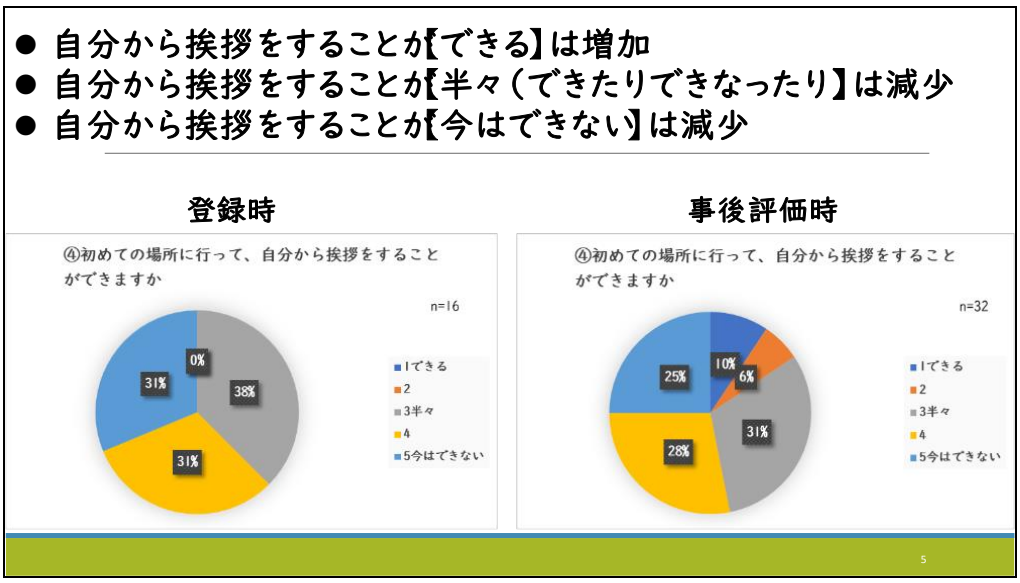
【概要】ひきこもり支援の専門機関との連携はもちろん、保健所、医療機関など地域とのつながりは強化されつつあるが、まだ浸透には至っていない。(新しく居場所を開設した事業所はない状態)
【課題】今回の助成事業の中で、資金分配団体の皆様から様々なアドバイスをいただいた。その中でも、座間市のひきこもり支援事業所の見学は大変刺激になった。私達は、「地域にないものは作ろう」と自分たちで活動の領域を広げてきたが、反面、地域のネットワークを構築し連携することにあまり力を注いでこなかったように思う。現在子ども支援の事業部では県のネットワークを構築すべく力を入れているが、ひきこもり支援においてもそのような地域との連携は今後必須であると考えるに至った。「ないものは作ろう」に加えて、「ないときは頼ろう」という姿勢を学べたのは大きかったと考えている。

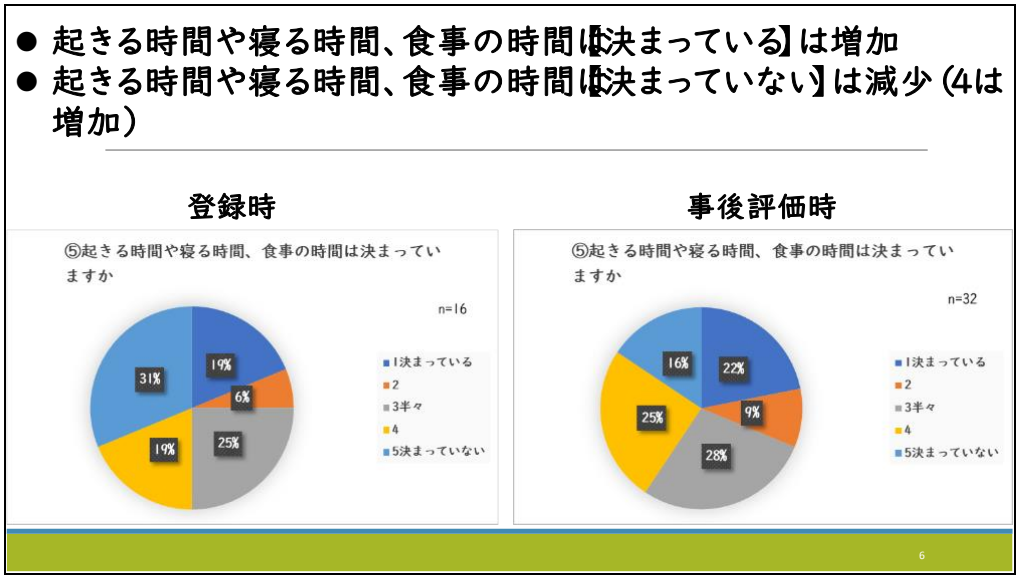
4-4-3)アウトカム達成度についての評価(複数の短期アウトカムの達成度を総合的に見て(中長期アウトカム・今後の活動に向けた展望など含む))
【長期アウトカム】栃木県において、ひきこもりや不登校等、社会に対する生きづらさを抱える人々に対する理解および支援の多様化が進み、様々な生き方を受容できる地域・社会になる。
【評価】地域とのつながりや連携部分に課題の残る３年間だった。もう少し積極的に連携の姿勢を打ち出し、外部とのつながりを作ることができればと反省している。
その一方で、事業実施元としての数値（参加人数や状態変化など）はおおむね達成することができた。それだけこういった支援の場を必要としている人がいる、ということは明確になった。
活動の中で、参加者が次々に社会参加の力をつけていく姿を見られたのは、我々の醍醐味であった。数字の背後に、１００名以上の人々の人生がある。その人達がより生きやすい社会を作るために、今後も事業継続の努力を続けながらアドボケイトしていきたい。
次年度以降は、活動から収益を得られる事業体になるべく、新しい組織づくりを企画しているところである。まだまだ自走には時間がかかるが、なんとか活動を継続し、１０年後には自立できるよう努力していきたい。

4-4-4）波及効果（想定外、波及的・副次的効果など）
今回同じ助成を受けた、アートで子供達を支援する団体と、中間報告会で意見交換をする機会があった。アートによるエンパワメント、という活動にヒントを得て、２０２２年度期間限定で、今回事業とは別に「アートの学び」というプロジェクトを行った。
「てしごとや」の活動は内職や手仕事などの「しごとはじめ」だが、「アートの学び」ではその前段階として、コロナ禍によって働き口を失ったり、社会不安を増して家から出られなくなった若者をアートでエンパワメントしようという趣旨の活動である。これが非常に当事者の意欲や状態変化を喚起した。「てしごとや」から「アートの学び」に参加した当事者のほとんどがプラスの状態変化を起こしたことは驚きだった。
本事業がなければおそらく企画できなかったプロジェクトである。同様の活動を模索する団体も出てくるなど社会的インパクトも大きかった。

４-４-5）効率性の向上
【評価小項目】事業に参加した当事者のうち、どのくらいの人々に状態変化があったか

✧　利用者へのアンケート結果の一部を掲載





５．成功要因・課題

【社会課題解決に貢献したアウトカム】

①　ＳＮＳ相談の開設：栃木県において、新しい相談窓口を作ることができた。

②　能力開発の場の提供：「寺子屋」では学びの場を得られなかった人々に学びの場を提供することができた。「てしごとや」では、相談の次に社会とつながるスモールステップを作ることができ、そこからまた小さなステップを踏んで次の支援につながる人々の一助となった。

【達成が困難であったアウトカム】

①②③とも、当事者に対する支援は充実できたと自負しているが、その次のステップである「社会の理解を促す」「社会にインパクトを与える」ことにはパワーが欠けていたという反省点がある。個人の課題を解決しながら、もっと社会的インパクトを意識した活動ができればよかった。

６．「つながり」の強化

【新たな「つながり」】複数の医療機関と連携を取ることができるようになった。

【「つながり」の強化（２）】県内各地のひきこもり支援窓口に、毎月活動予定を送ることが連携強化の一助になったように感じている。

【「つながり」の強化（３）】他の実行団体のイベントにオンライン参加した。他地域のひきこもり支援団体と相互に見学の機会を作っていただくことができた。

【「つながり」の強化（４）】当事者に「てしごとや」や「寺子屋」の活動を紹介してくださる団体が複数あった。

【「つながり」の強化（５）】資金分配団体と共同で事後評価を行っているところ。

７．結論

７－１事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

・（１）、（２）それぞれ１箇所を選択し、〇をご記入ください。

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（１）事業実施プロセス				〇	
（２）事業成果の達成度				〇	

７－２事業実施の妥当性

既存の社会資源に乏しい、「雇用されることを直接のゴールとしない、社会参加の最初の一歩の場づくり」「４０歳以上のひきこもり当事者の支援の場づくり」「対面以外の繋がりの場づくり」という３つの場を創ったことは一定の成果に値すると考える。

そしてその場を地域社会に定着させたこと、そこに想定を超える人数の方々が参加してくださったことが、事業実施の妥当性の証明になるのではないだろうか。

この３年間で自治体のひきこもり支援窓口も拡大し、県内の多様な地域でひきこもりの支援、場づくりが行われるようになってきた。一部の市町とは定期的な連絡やりとりや連携が取れるようになり、同様の場を創設したいと考える自治体も出現したことは大きな成果である。

反面、地域の経済団体とのつながりが作れなかったことがあり、達成度の自己評価としては「想定した水準以上にある部分もある反面、改善点もある」という結論になった。

８．提言

現在の公的なひきこもり支援はすべからく「雇用されうる力を培う支援」となっている。だが、何年も社会とつながる機会を喪失していた当事者が、ようやく外に出てきた次のステップが「雇用されること」というのはかなりハードルが高いのが実情である。せっかく勇気を出し

て社会につながろうとした当事者が、「就労」という言葉に不安を増して先に進めないのはあまりにももったいない。既存の支援の前段階として、今回我々の実施した「当事者をエンパワメントし、自らの力で次のステップに向かうための支援」にスポットをあてた場を、ぜひ社会に充実させていただきたいと願う。

９．知見・教訓

【活動を通して得られた知見】「ひとは元来つながりを希求する存在である。一見孤立を望んでいるように見えるひとも、社会に対する不安が取り去られ、エンパワメントされれば自然に自らつながりを求めて動き出すことができるようになる。当事者の前にレールを敷く支援ではなく、当事者を信じ、エネルギーを充填するための支援に注力することが、ひきこもり当事者の社会参加支援に向けた最短の道である」

（事例紹介）＊２０代男性・大学卒業時就職活動に悩みそのまま不安を増大させてひきこもりとなる。家にいる間は不安に囚われて、携帯やＰＣが自分を監視しているのではないか、という妄想にとらわれ動けなかった時期もあった。人づてに「てしごとや」を知り、そこで活動を行ううちに通院もできるようになり、当初持っていた妄想は消失。活動量を増やし、「てしごとや」の次のステップとして行っている、一日体験がメインの「しごとや」に安定して通えるようになった。そのころから「サポートステーション」への通所を開始。最初は不安そうだったが、「しごとや」と並行して通ううち、就労訓練に参加できるようになった。

参加から５年たった現在はＰＣを使った仕事もできるようになり、この事業の共同評価の事務処理を担当してくれている。先日、「今年は就職をめざそうと思う」と本人が自ら話してくれた。

【活動の中で得た教訓】

３年間、企業とのつながりを模索してきたが、コロナ禍と重なったこともあり、なかなか就労体験の場を探すことが難しかったのは反省点として残る。またそのような人々と話すときに常に感じることが、なんのつまづきもなく経済社会に溶け込んだ人々や、不安を感じたことのない人々にとって、まだまだひきこもり当事者には「動こうとしないダメな人」というスティグマがつきまとっていることを痛感する。この偏見をどう消失させるかは、私たちの今後の活動にかかっているのかもしれない。

（事例紹介）＊３０代男性・大学卒業時正社員をめざしたが就労がかなわず、派遣社員として働いた。長時間勤務に疲弊しきって８年で離職。その後まったく動くことができなくなった。農村地帯の小集落に暮らしているが、平日、彼の車が家にあると、近所の人が「今日はどうしたんだい？」と電話をかけてくるため、親も無職であることを近所の人に隠そうと必死になっている。そのため彼は日中市外の祖母の家に行って過ごし、夕方帰宅することを繰り返している。離職から３年たって「てしごとや」に参加するようになったが、気が休まる時がないせいか疲弊感が取れず、心療内科に通院しているが５年たった現在も「てしごとや」に月一回来るのがようやくの状態が続いている。

１０．資料（別添）

【参考１】

調査概要を記載する際は、下記記載例をご参照ください。

【定量的な評価の場合】
◎短期アウトカム～～の評価
１）調査方法
・アンケート調査（主な項目は～）
２）調査実施時期
・2022 年 XX～2022 年 XX
３）調査対象者
・事業の対象となった XX 人のうち，XX 人を無作為抽出にて選定し～。回収者数 X 人（回収率 X%）であった。
４）分析方法
・xx と xx についてクロス集計（カイ二乗検定，残差分析）を行った。
【定性的な評価の場合】
◎短期アウトカム～～の評価
１）調査方法
・訪問面接調査（半構造化面接）
２）調査実施時期
・2022 年 XX～2022 年 XX
３）調査対象者
・事業の対象となった XX 人のうち，最も特徴的な変化を示した X 人を対象にした。その選定方法として～。
４）分析方法
・調査から得られたエピソードをロジックモデルの枠組みで分析した。

【参考 2】

「つながり」は様々な関係があります。おおまかに以下のように分類してみました。どのような団体・人とどのような「つながり」であったかを考える際の参考にして、６.「つながり」の強化にご記入いただく内容に下記の【・・・】を選択して記していただければと思います。

1. 知り合うことができた　・・・【新たな「つながり」】
2. 連絡や相談をした・された　・・・【「つながり」の強化（１）】
3. 頻繁に連絡や相談をした・された　・・・【「つながり」の強化（２）】
4. 依頼され対応した・依頼し対応していただいた　・・・【「つながり」の強化（３）】
5. 複数回依頼され対応した・依頼し対応していただいた　・・・【「つながり」の強化（４）】
6. 共同で事業を展開した　・・・「つながり」の強化（５）